メゾンハレム
――華盛りの熟女――
「体験版」

「ご挨拶」

　この度は、「メゾンハレム　――華盛りの熟女――」体験版をご鑑賞下さりまして、誠に有難うございます。

　体験版は製品版の一部を抜粋した物です。分量は全部で５９ページ（内、挿絵が８ページ）です。

　このPDFの小説は、ページの表示方法を「見開き」、表示される大きさを５０％前後、に設定されると見易くなるかも知れません。宜しければお試し下さい。

　同梱致しております、『体験版』「メゾンハレム　――華盛りの熟女――」（「見開き」閲覧向き）、についてですが、これを「見開き」で閲覧される場合に、本や電子書籍を読むのとより近い感覚でお楽しみ頂けるかと思います。宜しければお試し下さい。

　尚、そちらを一枚ずつご覧頂く場合は、乱丁となってしまいますのでご注意下さい。

　製品版は分量が２０２ページです。その内挿絵が２６ページ（基本８枚、差分込みで２１枚、立ち絵５枚）となっております。

　製品版には小説の他に、使用した挿絵を纏めたＣＧ集（８００×６００サイズ、ＢＭＰ形式）もお付けしております。

　体験版と同様に、『「見開き」閲覧向き』のファイルもご用意致しておりますので、製品版も体験版と同じ感覚でご鑑賞頂けます。

　ご検討頂けましたら幸いです。

木森山　水道（夜山の休憩所）

目次

序章　『メゾンポーズ』の人々（体験版収録分）……三
第一章　別居人妻……（体験版収録分）……一七
第二章　肉食系女社長……（体験版収録分）……三八
第三章　熟れ尻未亡人……六〇
第四章　転機……八二
第五章　続、熟れ尻未亡人……一〇七
第六章　続、肉食系女社長……一二六
第七章　続、別居人妻……一四八
終章　その後の、『メゾンポーズ』の人々……一七二

登場人物紹介

水瀬　桜（みなせ　さくら）優しい人妻。長い間夫と別居している。
伊奈澤　菫（いなざわ　すみれ）気さくで優秀なバツイチ女社長。
北宮　小百合（きたみや　さゆり）料理上手で穏やかな未亡人。
中野　美保（なかの　みほ）夜遊びを覚えた女子学生。主人公の従妹。
主人公　大学四年生。真面目で初心な性格。女性に興味津々なものの童貞。

序章　『メゾンポーズ』の人々

「お、おはようございます」
初夏の早朝。ひんやりとした湿った大気を青年が震わせた。
「おはよう。今朝も早いのね」
穏やかで澄んだ声が重った。それは、背中までかかる髪を束ねた秋波の女性だ。無地の真っ白いTシャツと、膝下まで伸びる紺のロングスカートと言う、洒落っ気の無い服装の女性だった。
だが、その飾り気の無さが却って女性の清楚さと肉感的な魅力を引き立てている。彼女は若者の倍以上の歳月を生きてきたのだが、涼やかな美貌と同様に、体型がまるで崩れていない。
身体に吸着する白い布が、上半身のメリハリあるラインを描いている。肩が丸い。女性の証である胸は熟れた果実の大きさと丸みだ。シャツを突き破らんばかりに突出し、まんまるの球体を形作っている。
脇腹から腰にかけての稜線は、傾いた『し』の字を描いていた。腰から下の下半身

は野暮ったいスカートのせいで見えないが、少なくともお尻から太腿にかけては、衣服のぴっちりとした引き締まりが、その豊満さを示している。

彼女の名前は水瀬桜。二人の背後に建っている『メゾンポーズ』の住人である。

『メゾンポーズ』は、県庁所在地である街の中心と郊外の中頃にある、集合住宅密集地域に構えるアパートだ。最初に挨拶をした青年も住人の一人である。彼は大学四年生。すぐ近くの県立I大学に在籍している。

群青色の空間には、二人の他に誰もいない。青年は安っぽいジャージを着てゴミ出しに出ていた。桜もそうだ。お互い、中身が詰まった半透明の大袋を下げている。

「よいしょっ、と」

動物によるゴミの散乱を防止する為のネットをかきわけて、桜はまだ何も無かった所定の場所にゴミ袋を置いた。その間、青年もネットを持って助けていた。彼女が終わると青年がゴミ袋を置く。その時は、彼女がネットを支えていた。

「ありがとう。助かったわ」

些細な事でも、手助けされれば彼女はいつも誰にでも律儀に礼を言う。青年は俯いていた。数日前の出来事を思い、顔をまともに見られないからだ。

「それでは、いきますので」

「いってらっしゃい」

そのまま顔を見ないで別れを告げる学生。だが、そんな失礼を受けても桜の声は曇っていない。依然として張りと明るさに満ちている。

青年の目的地は歩いて十分程の所にある。円周二キロメートルの大きな池を中心とする県立公園である。そこには、ウォーキングしに来ている中高年が既に何人かていた。青年は入り口付近で準備運動を行い、日課のジョギングを始めた。

ペースは早くない。彼は運動サークルに入っているでも、愛好家で作られた街のスポーツ競技クラブに入っているでも無い。それ所か運動が得意でも無い。

身体を動かす目的は、新陳代謝を良くして日々を快適に過ごす事と、病気予防に努める事だ。適度な運動をしていれば防げた病気にかかり、周りに迷惑をかけた苦い経験がそう言った意識を形成させた。

時間をかけてゆっくりと、幅が広い遊歩道を走る。終われば簡単な筋力トレーニングに移る。総じて負荷が高いメニューでないが、それなりの時間運動すれば汗をかく。その上、太陽が高くなりだしている。終了時は汗だくになっていた。

「うふふ、朝からお盛んねぇ。はい、これご褒美」

明るくて弾む声。耳に心地良い声だ。振り向くと、身体のラインを浮き上がらせて

序章　『メゾンポーズ』の人々

いるワンピースを着た女性が缶ジュースを差し出していた。知り合いだった。

「あ、ありがとうございます」

知り合いの美人に汗まみれの姿を見られて青年は羞恥心を覚えた。だが、結露が起こり放題の缶を素直に受け取った。飲みたい気分では無かったのだが、感謝の気持ちを示す意味を込めて直ぐにプルタブを上げる。

「お久しぶりです。今朝はお散歩ですか？」

「えぇ。仕事がようやくひと段落したから、アパートで寝ようと思ったんだけど、精神が高ぶってるみたいで。歩いたら眠れるかなぁって思いついてね」

激務をこなしたであろうキャリアウーマンが微笑んだ。無邪気な子供でも、ここまで綺麗な笑顔はしないだろうと青年は見る度に思っている。

彼女は伊奈澤菫と言う。やはり『メゾンポーズ』の住人であり、所有者でもある。青年が不動産屋から聞いた話では、他にもアパートを持っているらしい。それだけでなく、住居の賃借を始め、他にも色々と事業を行っているそうだ。

「そうだ、学生クンが添い寝してくれれば確実よね」

まだ汗が乾いていない顔にずいっと顔を近づけ、囁く。微笑を浮かべる顔は、本気とも冗談ともつかない。

「あ、いや……」

初心な青年が返答に困っていると、尚も続いた。

「そうよね、アタシみたいなアがったオンナ、若い子の食指は動かないわよね……」

「そんな事！　菫さんは凄く綺麗で、人柄も良いのに。一緒に働く男性はみんな、そう思っている筈ですよ！」

しょんぼり下を向く年上女性の言葉を、荒い声で否定した。数メートル先を歩いていた散歩者が、何事かと立ち止まってこちらを見ている様子が視界に入った。

「ありがとう♪　ごめんね、変な事を言って」

一転、菫は無邪気な笑みを見せた。からかわれたのか。普通ならそう思うかも知れないが、若い店子は微塵もそう思わなかった。彼はただ、明るい女性が明るく振舞う事への安堵感を感じただけだった。そして、菫は散歩を続けるからと言い、別れた。

「おはようございます。今朝は終わりですか」

帰宅し、鍵を開けてアパートのドアノブに手をかけた時、静かだが良く通る声をかけられた。長い髪を結い、口元が綻んでいる若々しい――都心の繁華街を練り歩く若い女性と大差ない格好の女性だった。

北宮小百合である。彼女もアパートの住人で、青年とはよく話をする間柄だ。おか

ずを作り過ぎたからと、彼に差し入れする事もある。
「お、おはようございます。はい、今朝は終わりです。あの、朝食はもうお済で？」
「いえ、これから支度する所です。今はゴミ捨てを済ませた所で」
「良かった。なら、ちょっと待って貰えますか」
青年は部屋に入り、両手で灰色のアルミ鍋を抱えながら出てきた。それは小百合のおすそわけが入っていた鍋だった。
「これ。昨日の作りおきですけど、どうぞ」
「まぁ、助かります。筑前煮ですか。学生さんのこれは美味しいので嬉しいです」
ニッコリ微笑んだ。お世辞が混じっているとは思えない純粋な笑顔だ。
「小百合さんが作る料理には全然敵いませんよ」
それも世辞ではなかった。小百合は料理上手で、菫が経営する店で腕を振るってもいる。メディアに取り上げられた事はないものの、その店は十年以上も続いている。その原動力は彼女の腕前であると、青年は女経営者に聞かされた事があった。
その上、マメな性格でよく気がつきもする。そんな性格を見込まれて、『メゾンポーズ』の管理人を任されてもいる。年齢に不相応な出で立ちをしているが、決して軽薄な人間ではない。

序章　『メゾンポーズ』の人々

『メゾンポーズ』の入居者は、現在の所以上である。青年と、彼の倍以上も齢を重ねた美しい熟女が三人。その三人は、性格は異なるが大同小異だった。

「桜さ～ん、いるー？」

太陽が西に沈み、付近が茜色に染まった頃。玄関のチャイムが鳴った。甲高い機械音の余韻に、暢気な声が重なる。水瀬桜が良く知る暢気さ。アパートのオーナーであり住人でもある伊奈澤菫だろう。ドアを開けると案の定、人懐っこい実業家がいた。

「こんにちは。どうかしましたか？」

「いえね、さっちゃんとこで久しぶりに皆で夕飯をどうかと思って。留守にしていた時の話も聞きたいし」

菫は、いつもこのアパートで寝起きしていない。時々ふらりとやってくる程度なのだ。北宮小百合によると、所有しているアパートやホテルや旅館、自分の事務所などを転々としているらしい。その日の仕事先に近い所を利用するのだとか。

アパートの管理人であり、桜よりも付き合いが長い小百合は、緊急の連絡先の一つとして彼女の携帯電話の番号を知らされている。その為、所有者が根無し草でも住人に不都合は無かった。尤も、友達だからと桜も同じ番号を教えられているのだが。

水瀬家の夕食ができ上がっていたのだが、桜は二つ返事で誘いに乗った。女同士の会食は彼女にも楽しい時間なのだ。二人は小百合の部屋に向かい、施錠されていないドアを菫が開けた。

廊下の奥にある部屋の襖が開け放たれていた。部屋の中央に鎮座するちゃぶ台の上に料理が並べられている。準備は出来ている様だ。

「こんにちは、桜さん。直ぐ支度が出来ますから座っていて下さいね」

廊下に据えられた冷蔵庫から、アルミ製と思しき灰色の鍋を取り出し、それをガステーブルにかけながら小百合が言った。少しして、ぐつぐつと汁ものが煮立つ音と、濃い匂いがふんわりと漂い始めた。

「筑前煮ですか？」

「はい。美味しいですよ」

席に着いた時、この部屋に来るといつもふと目がいく場所に目がいった。そこはこげ茶色の茶箪笥の一番上だった。今日も写真立てが倒されていた。

小百合は未亡人である。だから恐らく、それに収められているのは、自分が知らない彼女の亡夫を写した一枚なのだろうと見当をつけている。だが桜は、写真立てが立てられているのを今まで一度も見た事が無かった。

女三人の晩餐会では主に菫が喋っていた。元々話し好きな性格をしていて、今は気を置けない友人と一緒なのだ。仕事が一段落した事からくる束の間の開放感と、小百合の家庭料理も舌を滑らせている一因だろうと桜は思った。

話の内容は他愛ないものだった。アパートの状況や、不平不満はないかと言った所有者ならではの聞き取り。そして三人の近況を話の種にしたりと。

不思議と愚痴は上らない。一度も出た事がない。激務をこなす菫は元より、熟女二人も働く女性であるのだが、そう言った事が肴になる事は無かった。

「ところでさぁ、学生クン、何かあった？　しょげてるみたいだけど」

そうこうしている内に、この場に唯一いない住人の話になった。桜と小百合は顔を見合わせた。

「今朝見たんだけど、何かしんどそうな顔してたのよねぇ。なんか無かった？」

二人には心当たりがあった。二日前の深夜十二時近くに起きた事だ。帰宅した彼がベロベロに酔っ払っていたのだ。そして嗚咽を漏らしていた。

既に寝ていた桜は、何かが壁に衝突した様な音で目を覚ました。それはそれは派手な音で、寝巻き姿の小百合もドアを開けて何事かと覗いていた。

顔を合わせ始めて四年目だが、泥酔している様子も、近所迷惑な帰宅も全くの初め

てだった。いつも穏やかで礼儀正しい、そんな彼の惨めな姿は痛々しかった。

女住人二人の視線に気付かないまま、彼は上着のポケットから部屋の鍵を取り出した。鍵穴に差し込もうとするが、なかなか入らない。どうやらそこまで正体を無くしているようだ。

カチッ、カチッと金属同士がぶつかり合う音が何度かした後、彼は仰向けにばたりと崩れ、涙を流しながらいびきをかき始めた。

一部始終を見ていた桜と小百合は、パジャマ姿で世話をしてやった。手の中の鍵を取って開錠し、二人がかりで中に運ぶ。部屋の隅に畳まれていた布団を広げて寝せてやる。服のボタンを外して、可能な限り締め付けを緩めてやりもする。

したたかに酔ってはいるが、急性アルコール中毒の心配はなさそうだった。大作業が終わると小百合は部屋に戻ったが、桜は残った。涙を流していた酔っ払いを一人にしておけなかったからだ。

枕元に正座し、じっと寝顔を見詰める。灯りの下で見ると、その顔はくしゃくしゃでとても見れたものでなかった。そんな惨状を、ジャージと一緒に畳んで置いてあったタオルを濡らして拭いてやる。

部屋の中は整然としていた。全然散らかっていない。廊下もそうだった。部屋の向

かって正面の左方、壁に触れる形で三つのカラーボックスが並んでいる。その中には難しそうな本が並んでいた。ジャンル別に五十音順で並んでいるらしい。

向かって右手には折りたたみ式の机と椅子。その上には色の濃い年季の入った電気スタンドとパソコン。それに、良く分からない直方体の小さ目な機械が二つ。

その横で正面側の角に小さなブラウン管テレビとその下に、横幅がテレビのそれと変わりないＤＶＤプレイヤーと思しき物が。

それらの前にはＤＶＤの収納ケースが置かれてある。背中を上にして収納するタイプな為に、タイトルが丸見えだった。その中には、いかにも若い男性が好みそうな物もあった。そう言う物と無縁そうに見えていたが、やはり男性と言う事か。

テレビの傍に雑誌や本が積まれている。そちらにもそう言う物が混じっているみたいだ。その延長線上にある三つのカラーボックスの中身とは対極にある物である。

自分はもういい歳だし、男性とのセックス経験だってある。だから動揺する事はない。ただ、息子の性的好奇心の表れを見た母親の気持ちとはこう言うものなのかも知れないと桜はぼんやり思った。

それから数時間後、彼は無事に目を覚ました。目覚めて直ぐに、隣人女性の顔が飛び込んできたせいか大いに目を剥いていた。事情を話された時には顔面蒼白だった。

土下座で迷惑を詫びる程である。
桜は乱心の理由を訊ねなかった。一言、気にしないでとだけ返した。だが、本人はそうはいかないらしい。以来、桜は以前と変わりなく接しているつもりだが、彼はどことなく気恥ずかしげにしている風に見える。
「詳しくは分からないけど、私達が知らない所で何かあったのかも知れないわね」
「桜さんも、さっちゃんもそう思うんだ。なら、私達がやる事は一つ！」
「やる事は一つ、ですか？　何をするんでしょう？」
小百合が尋ねると、菫はキッパリ断言した。
「悩み事を聞き出して慰めてあげるのよ。可愛げのある若い子なのよ？　慰めたくなるじゃない。もち、カ・ラ・ダ・を・つ・か・っ・て・ね。あぁ、若い子なんて何十年ぶりかしらぁ。アがった所が疼くわぁ。二人もそう思うでしょ？」

第一章　別居人妻

「どうしたんですか、皆さんお揃いで」
陽がとっぷり暮れた頃。菫を筆頭にした女三人が、帰宅直後の青年を捕まえた。薄汚れたグレイのトレーナーにジーパンと言う格好だった。汚れた軍手と茶封筒を持っている。顔はテカリを帯びていて、髪の毛がほんのり湿っていた。
「バイト帰り？　丁度良かった。お腹空いてたでしょ？　こっちこっち」
返事を待たず、女主人は若い店子を小百合の部屋に連行した。
「さぁ、召し上がれ。残り物だけど、さっちゃん作だから良いわよね」
逆らえる勢いでないと観念したのか、青年は用意された箸を持った。他人の、しかも女性の部屋に居るからか肩を寄せて窮屈そうにしている。
「ほらほら、お酒もあるわよ。ぐっといってぐっと。若い男の子なんだから」
出された皿が全て空になった後、菫がコップを持たせて注いだ。
「すいません。酒は殆ど飲めないんですよ」
「え～うそー。最近、夜中にぐでんぐでんで帰って来たそうじゃないのー」

デリケートな部分にいきなり触れるのか。桜は緊張した。隣に居た小百合の表情も固くなっている。

「あ……いや、その節は本当に申し訳ありませんでした」

「やーねー、桜さんもさっちゃんも気にしてないわよ。でも、どうして飲めないお酒なんか飲んだの？　ごまかしたい事でもあった？　バイト先の上司に苛められたとか、内定を取り消されたとか。ん？」

無神経、無遠慮な輩の口調から、子供を慰める母親のそれに変わっていく。口だけではない。歳を経ても豊満さを失わない胸を、背中にぎゅうぎゅう押し付けてもいる。両腕の上腕を首に絡ませ、頬同士を触れ合わせながら。

「いや……人様に聞かせる事じゃないですから……」

赤面して俯きながら青年が口篭る。大分効いている様だ。もう一押しだろうか。綺麗な女実業家が説得を続ける。

「秘密にする価値があるものでもないでしょう？　ストレスの素なんて、吐き出しちぇば良いのよ。私達が受け皿になってあげる。ううん、受け皿になりたいの。ね？」

見ているだけでも、同性で、歳を重ねた桜でさえドキドキしてしまう。日頃の奔放な態度からはかけ離れた、女の色と女の懐を混ぜ合わせた菫の手管。

青年はゆっくりと顔を上げた。何か言いたそうにしながら、身体に纏わりついている菫以外の二人――桜と小百合に目を向ける。小百合は頷いた。桜も。

「あの……年下の、女の従妹がいるんですけど……」

たどたどしく、苦々しく話始めてくれた。

彼には従妹がいる。その子はあの日、実家を経由して彼に連絡を寄越した。そうして、それぞれの生活環境から疎遠になっていた二人が会う事になった。彼は小さな頃から彼女を可愛がっており、再会が楽しみだった。

久しぶりに会った従妹は、以前よりもカルかった。明るいと言うよりもその方がしっくりくる態度だった。そして、そこには男もいた。アクセサリーをじゃらじゃら鳴らし、タンクトップで浅黒い筋肉を誇示する男だ。恋人との事だった。

従兄と従妹とその彼氏。奇妙な状況だと思いつつも、妹分とその恋人に食事を奢る青年。その後に、とんでもない事が起きた。

なんと、抱かせるから小遣いをくれと言うのだ。お金欲しさに、従兄に身体を開こうと言う従妹。それをニヤニヤしながら見ている男。目の前が真っ暗になる従兄。

そこがまだ飲食店で、周囲には人が居ると言うのに、変わり果てた従妹は従兄の股間に手を伸ばす。誘惑の言葉を囁き、そこをスリスリさする。が、血液は一向に集ま

らなかった。五分、十分。そして彼女は言った。
――なんだ、お兄ちゃんってＥＤなの――
顔が笑みの形に歪んでいた。馬鹿にした、蔑みの貌。
青年はもう、その場にいたくなかった。茶封筒をテーブルの上にもたもた置いて店を出た。それは、惨めな再会を果たす直前、働き先で受け取っていた汗水の結晶だった。以降の事は覚えていない。気が付いたら、桜の顔があったのだった。
「ふーん。災難だったわねぇ。で、ホントに立たないの？　今朝、丸めたティッシュが大量に入っているゴミ袋を見たけど、あれって学生クンが出したやつなんでしょ？
桜さんに聞いたんだけど」
いつもの明け透けな口調に戻っていた。
「それまでは大丈夫だったんですが、あれからは……」
「そっかそっか。まぁ、前向きに生きてりゃ良い事あるから。天知る、地知る、他人が知るってね。案外、今夜にでも良い事あるかもね」
酒を勧めながら女主人が気楽に言う。
桜は気付いた。彼女が自分にウィンクした事に。

「それじゃ、一番壷を宜しく♪　高熱水道費が十人前な所を見ると清潔にしてるだろうし、その上多分童貞だから変な病気は無いでしょう。ＨＰＶが心配なら、私が面倒みてあげるし。だから、ＥＤ治療がてら童貞クンの若いエキスを搾り取っちゃえ♪」

青年が酔いつぶれて眠った後。菫が桜に言った。極めてあっけらかんと。

「私は人妻よ？　知ってるでしょ？　そんな事、出来る筈ないわ」

「そうね、別居中の、夫と顔を合わせる事すら何年もしてない人妻さんだったわね」

菫の目が鋭く細まった。

「一緒に婚姻届けへ名前を書いた仲なのに、いつまでもほったらかし。自分の都合で離婚せず、やり直す機会を与えない。そんな鬼畜に立てる義理なんてないわよ」

「……でも、私はもういい歳なのよ？」

「関係ないわ。彼は、多分あなたを女として見てる。いえ、あなただけでなく私達をね。嬉しい事じゃない」

そこで一息つき――。

「歳をとって閉経したってだけで、私達はまだ女なの。胸もアソコもまだまだ十分女なの。セックスを楽しみたいって気持ちはまだまだあるでしょ？　でも、歳食った女を抱きたいって男いる？　男は殆ど、若い子ばかり見てる」

「だからって……」

「それに、EDも治してあげなきゃ。恐らく、心因性で急性的なものだから、慕ってる美人に筆下ろしの相手をして貰えれば復活するんじゃない？　まだまだ若くて、自慰の味も知ってるのに、一生セックスを楽しめなくなるのは可愛そうでしょ？」

青年から秘密を聞き出していた時の顔をして言う。桜は何も言えなくなった。まだ、納得していないが、若い男性が男性能力を失うのは確かに可愛そうだ。自分が治せる立場にあるのなら行動するべきかも知れない。

菫は小百合と二人で若者を彼の自室へ運んだ。そして、動かない桜を同室に押し込めた。カタリとも音がしない部屋の中、布団で眠る酔い潰れた青年と、浮かない顔の人妻を白い蛍光灯が照らしていた。

桜の頭に、青年の姿が浮かび上がる。毎朝ジョギングに出かける姿。買い物帰りの自分の荷物持ちをしてくれた姿。小百合におすそ分けを返している姿。菫にからかわれて赤面している姿。そして、菫の言葉が蘇る。

――一生セックスを楽しめなくなるのは可愛そうでしょ？――

確かにそうだ。今はもう慣れたが、セックスの味を知った頃、性欲が旺盛な頃に禁欲生活を強いられていたら、自分は我慢できただろうか。

それに、不能となれば子供を作れない。そんな男性を迎え入れてくれる女性がいるだろうか。男女が一緒になると言う事は、それぞれの家が近しくなると言う事でもある。男性能力が無い男を、どちらの一族も肯定してくれるだろうか。

考えれば考える程、可愛そうだと言う気持ちが強くなる。治せるものなら治してあげたい。ひょっとすると、自分が出来るかも知れない。

いつの間にか。

桜は彼の布団を剥ぎ取り、ズボンを下ろしていた。それだけでなく、股間に手を伸ばしもする。やわやわと遠慮がちにさすってみる。男性器特有の柔かい感触が伝わってくる。こんな感触は何十年ぶりか。

眠る青年の腰が、時々ビクンッと跳ねた。起きてしまったのかと、桜はその度に怖気づいたが、そうでないと分かると行動を続けた。

（あ……段々、血が集まってる……）

どの位そうしていただろうか。とうとう男性器が硬さを帯び始めた。そうなると後は直ぐだった。みるみる下着が盛り上がり、縦長のこんもりとした丘ができあがる。

「良かった。勃起した」

ほうっと安堵の溜息をついた。その時。

「み、水瀬さん」
青年が目を覚ました。酒が回っている筈なのだが、その口調は明瞭で、明確に目を剥いている。
「あ、あの……御免なさい、その……私がＥＤを治してあげられないかと思って」
自分の股間を見て、青年は更に目を見開いた。
「勃起してる……！　何をしても駄目だったのに、水瀬さんのお陰で……」
目尻に涙が浮かんでいる。余程、嬉しかったらしい。余程、苦しんでいたらしい。
回復を喜び、桜に感謝を述べる若者。そんな彼に、桜の胸がトクンと鳴った。意識しない言葉が零れ落ちた。
「安心するのはまだ早いわ……射精できるかどうか分からないから……」
その台詞を耳にして、顔から火が出る思いに襲われた。自分は何を言っているのだろう。戸惑うが、もう言葉は青年に届いている。彼はこちらをじっと見ている。神妙な面持ちで。その瞳は潤んでいた。期待しているのだ。こちらの行動に。
（そんな目で見詰められたら……）
自分で撒いた種だからと、桜は心を決めた。まずは青年の下着を下ろす。美貌の隣人によって再び目覚めた男が、ブンッと風を切って立ち上がった。

息を呑んだ。それは、亀頭の境を超えて皮を被っていた。しかし、先端の膨らみ加減も、肉幹の太さと長さも別居中の夫のそれを凌駕していた。

経験人数が乏しい桜では、一般的な基準でどうなのか分からない。だが、彼女の知る限りでは一番だ。性交渉から離れて随分経つ人妻の胸がドクンドクンと高鳴った。

「た、逞しいのね……こんなに先っぽが広がって、血管が浮いていて」

ドキドキしながら、充血した陰茎を握る。耳をそば立て、苦痛の声を聞き逃すまいと注意し、握る勃起の様子を凝視しながら徐々に力を加えていく。人妻は、適度に圧迫されて扱かれると男根が喜ぶ事を知っているのだ。

「どう、気持ち良い？」

「はい、水瀬さん……凄く良いです……」

引きつった青年の返事が、奉仕する喜びを大きくする。歳を取り、子供を産む機能が無くなってしまっても、男性を喜ばせ、喘がせている。しかもこんなに若い子を。

ゾクリ……。

背筋が粟立ってくる。身体が火照ってくる。若者へ性奉仕していると、ずっと忘れていた感覚が蘇ってくる。自分は興奮している。終わった女だと思っていたのに。

「あぁ、水瀬さん、もう出ちゃいそうです……こみあげてきて……射精が……」

上擦った声での訴えに、桜は微笑んだ。
「まだ駄目。我慢して。射精するのなら、私の中でね」
桜の昂ぶりは女性器にも及んでいる。何年も空だった膣が熱く潤んでいる。手で掴んでいる、しなやかで硬い、そして熱い勃起を入れて満たしたい。そんな衝動が刻々と強くなっていく。
（あぁ、疼く……まだこんな……私でもオンナの気持ちになれるなんて……）
服を手早く脱いだ。ブラジャーは汗で濡れていた。下着に手をかけた折には、股間とクロッチ部分が名残惜しそうに糸を引いていた。ぬとーっと長く。
衣服も下着も畳まずに放り投げた。几帳面な性格の彼女らしからぬ乱雑さだった。そうして一糸纏わぬ姿になると、青年を跨いで立った。
「ちょっと待っててね、もう少し濡らすから」
利き手でない方の手を、わざわざ後ろに回して、下から膣内に指を忍ばせる。下向きの、いわゆる下つきの秘所からくちゅぬちゅと言う水音が生まれ始める。
「んっ……もっと濡らさないと……ＥＤの治療が出来ないから……あぁ……」
眼下の若者に見せ付ける様に、もうすっかり老いてしまっていたかも知れない膣内のヒダヒダを弄り続ける。青年の目は釘付けだった。ぼってりとした唇の奥にある、

ピンク色をしているであろう肉部も見えているのかも知れない。

（見られてる……こんなに真剣に、こんなおばさんのいやらしい行為を見てくれている……じっと、瞬きもせずに……あぁっ……！）

自分の身体の奥まで見られている。そう思うと、身体がカァッと熱くなる。中のぬめりが一層酷くなる。若い男の前で淫らな事に耽り、凝視されるのが気持ち良い。

やがて。膣がズキズキと疼き出す。我慢できない程にだ。それを鎮める方法を人妻は知っている。そして、それが大きな女の喜びを享受させてくれる事も。

「こ、これ位なら大丈夫かな……いくわよ、学生さん……」

飽くまであなたの為と言う建前を崩さず、肉欲の衝動に身を任せる人妻。若者の腰の横でそそり立つものの延長線上にある位置に足をつける。そして、ゆっくり腰を沈ませていく。

オトコの先端とオンナの割れ目が近づいた頃、細い指で亀頭を摘む。先っぽの、ほんの一部だけを濡れそぼった女裂に――。

ぐちゅり……。

身体が炎熱に包まれた。背筋がゾクゾクッゾクゾクッと粟立っている。見えないが感じる。はっきり分かる。膣内の疼きも大きくなった。早く食べたいと叫んでいる。

第一章　別居人妻

若い男性はぎゅっと目を閉じていた。脇に投げ出している手が拳を作り、それがわなわなと震えていた。

（この子も気持ち良いって思ってる……もっと飲み込まれたいって思ってる……相手はこんなおばさんなのに、オンナと見てくれてる……！）

じゅずずずず……。

桜は更に腰を沈めた。若い学生の、広がっている亀頭が、開かずの間だった媚肉をこじ開け、広げていく。自分の大きさに。自分の勃起の形に合った型へと。

「くぅぅ、私の膣、広げられてる……学生さんのおっきなもので、若い子のお○んちんの形に変わってく……んんっ」

「これが女の人の中……想像していたよりもずっと凄い……気持ち、良いっ……うあぁぁ……」

「初めてなの？　童貞だったの？」

根元まで飲み込む作業を続けたまま、桜が熱っぽい声で訊ねる。

「はい……初めてでした……」

ゾクゾクゾクゾクゾクッ！

童貞を奪った。若い子の。学生の。妙齢の女を差し置いて、こんな閉経した女が。

第一章　別居人妻

「んくっ、コツンて、あはぁ、奥まで子宮口まで」
「コリってして、これが子宮口……うぅっ……！」
ドビュッ、ドプゥッ！
粘っこくて熱い汁が最奥を叩いた。撒き散らされる粘液が、男を忘れて久しい膣内の隙間に染みこんでいく。
（んんあぁっ……若い子の精……濃くて熱い、ネバネバの若い子の精……っ！）
少しの間、桜は天井を向いてその逆りの感触を楽しんでいた。若々しい精液で、古ぼけた膣内を満たされるのは甘美だった。枯れた女が、若々しい男を夢中にさせている実感は、とても背徳的で、女としての矜持を刺激する。
「うふふ、我慢してって言ったのに、我慢できなかったわね。しかも、女性の膣内で射精するなんて……私を妊娠させたいの？　学生さん」
「すみません、あんまり気持ち良くて……責任はとりますから」
「なんてね。いいのよ。生理がこなくなってもう長いんだから。子供の心配はいらないから、安心して。それよりも」
もっと盛大な射精を受けたかった。最初の、頼りない射精でもあんなに楽しめたのだ。若々しい逆りを膣内で受けたら、子宮口で受けたらどんな快感を得られるのだろ

う。それを早く味わいたい。

「続きをしましょう。まだ若いんだから出来るわよね」

完全に火が点いた人妻は勝手に腰を振り出した。膣肉で包まれる勃起はまだビクビク震えている。精力の面では問題ない。

「あふぅ、硬い、学生さんのお○んちん、若い子のお○んちん、いいっ！」

普段の落ち着きが見る影も無い。久しぶりの性交に、人妻はすっかり夢中だ。男と交わり合う快感を思い出し、貪っている。

下品に足を踏ん張り、腰を上下に振る。ぐいんぐいんと前後にグラインドする事も織り交ぜる。若い勃起を膣内のそこかしこに当て、目が眩む場所を擦らせる。

身体は一箇所たりとも遊ばせない。たゆんたゆん揺れる乳房を自身で揉みしだき、興奮で充血した乳首を摘み、強弱をつけてクリクリ潰す。性感で肥大したクリトリスにも指を伸ばし、指の腹でさわさわ弄る。

「水瀬さん、水瀬さん！」

浅ましく快感を貪る隣人に、青年は酷く興奮している様だ。瞬きせず、血走った目で熟女の乱態を凝視している。長い間、ただの肉筒に成り下がっていた部分で、勃起は益々大きくなっていく。彼は太腿を掴み、腰を突き上げる。若さに任せて。

「凄い、こんなセックス初めて、あぁ、まだ女だった、私はまだオンナだった！」
内心を包み隠さない。言葉だけでなく、身体でもそれを表現する。
「水瀬さんは女ですよ、こんなに淫らで、綺麗で素敵な女性です！」
若い学生もまた本心を伝える。言葉と身体で。
「嬉しい……学生さんのお陰よ。あなたが、こんな私を、こんなにオンナだと実感させてくれる！」
心もすっかり裸になっている。白い肌が興奮の赤に染まり、玉の汗が滲んでいる。膣内にも変化が。入り口が狭くなっていき、同時に奥が広がっていく。
どれもが絶頂の兆しだ。何年も孤独であった女が、若い男と触れ合い、再びオンナになろうとしているのだ。
「水瀬さん、水瀬さんっ！」
相手をする若者の方も絶頂が近かった。膣内のそこかしこを抉っている初心な亀頭は膨らみに膨らんでいる。いつ爆発してもおかしくない。
「出るのね、学生さん、射精するのね！」
若い勃起の様子を膣内で感じ取り、熟女は奔放に動いていたのを止めた。尻たぶをぺたんとつく。亀頭の鈴口と子宮口をべったり密着させ、そのままの状態で腰を小刻

みに揺する。何度も何度も。
「一番奥で出して、ね？　子供の心配は無いんだから、思い切り中で出して、私に射精を浴びせて、ね？　お願い」
ＥＤ治療と言う建前が完全に吹き飛んでいる。艶かしい赤ら顔で砂糖菓子をねだる子供のへつらいを見せ、腰をクイクイ振り続ける。若い学生の精力溢れた、盛大な膣内射精を味わいたくて。
「中で、綺麗で優しい水瀬さんの中で射精する、水瀬さんの中を精液で満たすっ」
青年は拒絶しない。自分の望みを口にして一心不乱に上り続ける。
「あんっ、そう、満たして、私の中を若い精でドクドク一杯にして！　降りている子宮口にドピュドピュかけて気持ち良くさせて！」
「気持ち良くさせます！　気持ち良くなって下さい、水瀬さん！　たくさん出しますから！　全部受け止めて！」
ドビューッ！　ドクドクドクッ！　ドビュッ、ビュッ！　ビュルッ！
思いの丈を叫び、熱い滾りを開放した。若い学生が。他人の、熟れた妻の膣内で。
「んんっ……出てる……若い子の、学生さんの逞しい精液……濃くて熱いのが奥に何度も当たって……膣に広がって……ふぁ……」

降りていた子宮口がしたたかに打ち据えられた。みるみる蒼い精汁の海に沈んでいく。最奥から溢れた熱い粘液は、ヒダヒダの間に染み入っていく。激しい出し入れでも掻き出されなかった古い精を覆いながら。最初の射精とは段違いの悦楽だ。

「あ……ぁ……くるぅ……っ！」

ビクビクビクッ！　ビクビクッ！

膣内が満たされていく影響が全身に及ぶ。目の前が白く広がり、そこで無数の星が飛び散る。甘い電流が身体の隅々を駆け巡る。気が遠くなる浮遊感に襲われる。

「はぁーはぁー……はぁあ……私、もうおばさんなのに、こんな若い子と……子供程も歳が離れた学生とセックスして……若い精を浴びて……」

脱力。力が抜け、前にドサリと倒れてしまった。それを青年が受け止めてくれた。

「大丈夫ですか、水瀬さん」

「え、えぇ……少し疲れただけだから」

ずっと味わっていなかった、セックス後特有の心地良い倦怠感。瞼が重い。

「疲れたなら、このまま寝て下さい。お世話、しますから」

――ありがとう――そう言ったつもりだったが、声に出たかは怪しかった。それが最後に思った事だった。桜は、青年の胸の中で寝息を立て始めた。

第一章　別居人妻

「で、どうだった？　ヤっちゃった？」
翌日、一人で遅めの朝食を取っている所に菫がおしかけてきた。小百合も一緒だ。
「……えぇ……まぁ」
「うわぁ、桜さんスケベ～。若い子を食べちゃうなんて。人妻なのにー」
「それは……菫さんがけしかけたんじゃないの！」
真っ赤な顔で叫ぶ桜。菫はケタケタ笑っている。
「冗談よ。でも、あの子が回復したのなら良かったわぁ。これで心置きなくつまみ食い……もとい、リハビリ手伝いが出来るってものよ。どうせなら、アタシが一番絞りを頂きたかったけど、逆にトラウマになっちゃう虞があるからねー」
「トラウマ、ですか？」
「そ。私ね、こう呼ばれてるの。別れた旦那からも似た様な事言われたわ」

第二章　肉食系女社長

「お待たせ～♪　二番壷、伊奈澤菫、身体を清めて参りましたー」
場違いな明るい声が響く。ここはラブホテルの一室だ。
「どう？　どう？　水も滴るいい女、でしょ？　十歳は若く見えるかしら」
しっとりと濡れた髪。湯水で温まったほの赤い肌。服装こそ普段と同じだが、醸し出される色気がグンと上がっている。そう店子の学生は思った。
尤も、手広く事業を手がけるこの女実業家は、年齢不相応な美貌の持ち主である。明朗な性格も相まって、非常に魅力的な女性だと青年は日頃から評価している。
「若いかどうかにこだわる事なんてありませんよ。いつも綺麗じゃないですか」
彼は正直な感想を伝えた。世辞は入っていない。ましてや、ホテルに誘われたからとおべっかを使っているのでもない。
水瀬桜と関係を持った数日後の事だった。突然、彼の部屋に菫がやってきた。彼女は彼をラブホテルに誘った。青年は小躍りした。桜と性交渉した事で、女性を抱く味を占めていたからだ。従妹との一件は、もう忘却の彼方だった。

とは言え、浅ましい欲望を表に出す事は躊躇われた。しかし、強引に引っ張ってこられたのだった。初めに彼が浴室を使い、次いで誘った本人が湯を浴びた。

「ところで、服を着たままでいいんですか？」

菫だけでなく青年も普段着――Tシャツとジーパン――だった。

「えぇ。その方が、日常を穢してる感じがして楽しいじゃない」

青年は「そう言うもんですか」と返した。やはり、童貞でなくなったばかりの、若い身空ではそう言う風情が理解し難いらしい。

とは言え、嫌がる様子は無いので、菫はその反応を気にしなかった。今この時に重要なのは、相手が嫌がらない事だけだからだ。

「それじゃ、早速始めましょうよ。初めはアタシが全部するから。ベットにある枕の上に頭を乗せて、仰向けに寝て。じっとしててね」

女の味を知って間もない学生が、齢を重ねた女社長の指示に従った。

「じっとしていてね、じっと。動いては駄目よ」

軽い声から、熱を持った吐息を伴う囁きに変わっていく。菫は青年のTシャツを脱がせた。上半身が露になった若い肉体を跨ぐ。

青年の身体を道路に見立て、自分が歩道橋になる。四つんばいで。若者が熟女社長

の肉籠の中に納まった。
女社長の右頬が、学生のそれと触れ合った。動物の愛情表現さながらに、すりすりと頬を擦り合わせる。その度に、纏まった髪から、シャンプーの匂いがふわりと漂い広がっていく。仄かに甘く、鼻に止まらない癖の無い匂い。
頬を擦り合わせながら、菫は青年が脱力していくのを見た。視界の端で、強張って若干浮いていた肩がベットに落ち、シーツに走る皺が浅くなっていく。緊張で縮こまっていた身体が弛緩していく。
「緊張しないでね。気持ち良い事をし合うだけだから」
耳元で囁き、顎を舐めた。硬い骨をなぞり、その裏側に唾液の跡をつける。うぅっと言う呻き声と共に青年の顎が上がった。そこに、菫の顔が食い込んだ。餌皿に顔を突っ込む犬の様に密着して、顎と首の付け根をペロペロ舐める。
（たくさん可愛い声を出してね……）
呻きが、快感の喘ぎへと変わって来た頃、舌を這わせる対象が変わった。次は喉だった。唇で喉を噛み、その温かい口内に収まった部位を舌で舐め回す。廊下を隈なくぞうきんがけするのと同じく、何度も何度も舌を動かし、舌が這う味を刻み込む。
「うあぁ……伊奈澤さん……っ」

青年の口から、感極まった声が漏れた。まだ始まったばかりだと言うのに、性器には指一本触れていないと言うのに、股間がこんもりと盛り上がっている。

「初めに言ったけど、動いては駄目よ。じっとして、快感を味わっていて」

念を押すと、今度は襟首に取り掛かる。口の中で舌に唾液をたっぷり纏わせ、首筋へ着地させる。時にはべったりと舐め進み、時には舌先を尖らせてそろーっとゆっくり進む。肩が浮き、首の横に窪みが出来ればそこをぺちゃぺちゃと舐めてやる。

意識しての事で無いだろうが、青年の身体は跳ね上がる。ビクッ、ビクッ、と陸に打ち揚げられた魚よろしく。

「うふふ、動いては駄目と言っているのに」

枯れた女が、若者を快感でビクつかせている事が愉快だった。だが、まだまだ序の口なのだ。熟女は聞かん坊な体を押さえつけにかかった。両手で上腕を押さえる。

日常的に身体を鍛えているでもない女の力では、若者を拘束する事はできない。だが、彼は女の力に従順だった。見ると歯を食いしばっている。言われた通りに我慢しようと、意識して身体の反応を制御している様だ。

「いい子ね」

若い学生に言う事をきかせる小気味良さを感じながら、舌の標的を胸に移した。興

奮で硬化した乳首を口に含む。ねっとりと温かい口内で、小さな突起を弄ぶ。ぬめる舌で何度も倒し、突き、唾液を塗りたくった後に唇で挟みちゅうちゅう吸う。

その一方で、空いている胸では手の平が踊っていた。パーの形に広がった掌にある五本の指が青年の胸板に円を描く。薄皮一枚を、指の腹にある微細な凸凹――指紋でそろーっ、そろーっと。

意思で押さえ込んでいた筈の若い身体が再び跳ね始めた。その合間に、うぁっ、うぉぉっ、と獣じみた、腹の底からの呻きが起こる。

「しょうがない子ねぇ。こらえ性が無いんだから。まだ始まったばかりなのよ？」

困り顔どころか薄い笑みを浮かべながら、菫はベットの端に置いておいた紙袋に手を伸ばした。一旦、四つんばいから立ち膝になり、シーツの上に中身をぶちまける。

マジックがついたリストバンド風の拘束具が幾つかと、プラスチック製のボトルが二本転がった。ボトルの中身はオイルである。

「言う事を聞いてくれないから、縛っちゃいます。いいですね？」

身勝手な子供に罰を与える教師の顔で言った。青年はしゅんとして「すみません」と謝るだけで、他に何も言わなかった。菫は「よろしい」と返し、彼の手足を拘束。手首と足首を纏めて拘束具で縛る。前者は背中の後ろで。

熟女と青年の性交渉が再開した。中断前までにしていた事を、胸の左右を変えて行う。中止の間に興奮が鎮まったのか、彼の反応は控え目だった。時々、ビクンッと腰が浮く程度だ。

（もっともっと、アタシに夢中にさせてあげる……）

胸が終わると上腹に。鳩尾を始点に、お腹のラインに沿って舌が下りる。下腹も、それまでの執拗さが無かった。唇で噛み、舌でのぞうきんがけを一、二度する程度。そうして下る事を続け、いよいよ男性器に入り――。

「っ！」

青年が目を剥いた。脇腹を摩られたのだ。脇腹も性感帯の一つである。性器を舌で愛撫される。そう思った矢先の不意打ちである。

（まだまだ、期待通りにはしてあげないわ）

彼の反応を上目遣いで確認した菫はニンマリした。進行を止めて、脇腹責めに移行する。右脇腹を、尖らせた舌先でつーっとなぞる。そうしながら、左脇腹は薄皮一枚同士を擦り合わせる。ゆっくりと、極めてゆっくりと。

二つの泣き所を、異なる刺激で感じさせられ、青年の背中がしなった。拘束されていなかったら、手足をバタバタさせていたかも知れない。二十歳を過ぎた青年が、

駄々をこねてみっともなく暴れる子供の様にだ。
脇腹への行為は、舐めから唇での噛み、指の腹にある凸凹を利用した意地の悪い摩りから、複雑なジグザグ走行、幾何学的な撫で上げに変わる。
だが、そうした変化はあっても行う速さは変わらない。飽くまでゆっくりと、弱火で肉をじわじわあぶるのと同じく、経た年月の中で会得した技術を駆使して若い身体を快感であぶってやる。
それまで、一度も攻撃を受けていなかったにも関わらず、男性自身は猛っていた。まだ露出していないので隆々とそそり立ってはいないが、締め付ける邪魔者を跳ね除けようと躍起になっている。しきりにビクついているのだ。
「苦しい？　いま楽にしてあげる」
主導権を握る女社長は、最後に残っていたズボンと下着を膝下まで下ろした。その途端、大気を切って勃起が起き上がった。
下着が振り払われた際に引っかかったからなのか、亀頭部に皮がかかっていない。未熟な肉の膨らみがビクビクと脈動している。広がった傘の下側に伸びる肉幹も、太く長く膨張している上に、何度もビクついている。
「流石ね。若い若い。思ったよりも逞しくて元気元気♪」

人差し指をピンと伸ばして、指の腹で鈴口をぐりぐり抉る。無論、男性の身体に無知な処女ではない。抉るといっても力を込めない。ただ、男を快感で泣かせるのに十分な位の、絶妙な力での抉りだ。

「うあぁっ、それ駄目です、こみ上げてきて……！」

「おっと、やり過ぎは禁物ね。一発目はゴックンさせて貰うんだから♪」

熟練の女社長は、若い学生の勃起をパクリとくわえ込んだ。頬を窄めて筒状にし、幹の外周を包み込む。上目遣いで見ると、彼はこちらを凝視していた。唇がぬーっと伸びた、格好の良い姿ではないのだが、口内の勃起の震えが増している。

舌に唾液を塗し、剥き出しの亀頭をチロチロ舐める。ねっとりと舌を使って肉傘を上から下にペンキ塗りし、時々ずずっと吸引する。竿の円周を捉えた唇を、頭ごと上下する事も加える。裏筋にさしかかれば下唇をキュッと締めた。

「ハァ、ハァ、出そう、射精しそうです、出ちゃいます……！」

程なくして、若者が弱音を漏らした。顔と下半身ではそれなりに距離があると言うのに、はぁはぁと言う荒い息遣いが菫の鼓膜をはっきりと震わせている。息だけではない。腰にしろ頻繁にビクッとせりあがる。

「ちゅぽんっ。良いわよ。出したい時にいつでも出して。思い切りね。飲ませて貰う

から。でも、出来るだけ我慢して。その方が気持ち良いから」

菫はニッコリ笑った。たまに見る、子供の笑顔を凌駕する綺麗な笑顔だ。だが、場が場だけに、今は酷く淫靡に思える。青年はそう感じた。

ずじゅずじゅっ～れろっ、れろっ、んんっうううーちゅぱっ、じゅるっ。

（出して、出して。年増女にどびゅっと濃いのを）

熟女社長の口淫が激しくなった。すっかり弱らせた獲物に止めを刺し、そして食らおうとしている。そんな勢いで、青年の蒼いエキスを噴出させようとしている。

青年は、自身の背筋が粟立ち、執拗に舐められる亀頭部が熱く燃え盛っているのを確かに感じた。

もう我慢できない。駆け上がってくる雄のマグマは制御不能に陥っている。これ以上は無理だ。もう出てしまう。と思った刹那、青年の脳裏に菫の言葉が浮かんだ。

――飲ませて貰うから――

更にイメージが視えた。自分の勃起を奥深くまで飲み込んで、迸る精を口内で受け止め、ゴクンゴクンと断続的に喉を鳴らす美社長の様子である。

青年の腰が浮いた。と同時に女の両手が尻たぶに回り――。

ビュクンッ、ビュクッ！　ドビュビュビュッ！

前戯で練り上げられた、学生の粘っこい濁液が、女社長の喉に飛んでいく。
（来た！　アタシが搾り出した若い子の雄汁！）
菫はえずかなかった。亀頭の境目を咥え込めるギリギリの位置まで、顔を後ろに下げて、蒼い精を受け止め続ける。口の中に白濁が溜れば喉を鳴らし、粘り気で落ちていかなければ唾を飲み込む。
（若いんだから、まだ残ってるでしょ？　全部吸い出してあげるわ）
舌先を尖らせて、鈴口をやんわり抉り、ずずっと吸引。出切っていない分を放出させようとさえする。
「んぐっ、んぐっ、はぁっ、濃いわぁ……すっごいドロドロで、喉に絡み付いて落ちていかない粘度で。この、男の苦味も堪んない。若返りそうだわ～」
受け止めた分を全てを飲み込み、笑顔を見せる。そして、まだ萎えない勃起を舐め清め始める。手を使わず、舌だけを使い、勃起する肉棒の表面を舐め上げていく。
「んふ♪　若い若い。大変けっこう」
一度出しても力を失わない男性器。顔が綻んでしまう。
「今度はこれを使うわね」
オイルが入ったボトルのキャップを開けて、中味を手に取る。掌を石鹸で洗う要領

で中味の粘液を手の平に塗す。
（さぁ、たくさん鳴いて頂戴）
菫は青年の横に寝そべり、片手で勃起を握った。
ヌルン、ヌルヌル、ぎゅちゅり、ニュルン、ぬちゅにゅちゅ。
上に下にと、全体をでたらめに擦る。軽く握る程度の握力で。ただそれだけだと言うのに、オイルの影響で粘着質な水音が発生する。たった二人しかいないラブホテルの室内が、その音で満たされる。
「くぁうぅ……熱い……また出そうだ、射精したばかりなのに……っ！」
青年が快感の喘ぎで唱和する。スムーズなオイル手淫は、性感帯の集中地帯である肉棒のどこもかしこも刺激し、彼に熱い快感を感じさせる。
オイルをたっぷり纏わせた手の平が、亀頭を全て包み込み、ぐいんぐいん回る。亀頭の境目を、強めに何度も何度も擦る。掌で亀頭を包み込み、根元までダイナミックにスライドし、そうして往復する事も。
摩擦を無視した軽快な手奉仕は、若者の勃起も頭の中も、快感の火でチリチリあぶる。彼はもう、射精する事しか考えていない。このまま搾り取られたい。それしか頭に無かった。

一撫で、二撫で。もう数回擦られれば、きっと射精してしまうだろう。そう感じた若い学生は、その瞬間を待ち望んだ。擦られる回数を数えてカウントダウンし――。

「だ～め。まだ我慢しなさい」

高みへと導いてくれていた手が離れ、陰嚢をやわやわと揉み始める。出口へ近づいていた精の昂ぶりが、徐々に徐々に引いていく。それに反比例し、男根の疼きが大きくなる。勃起が震え、快感でズキズキ痛む。我慢できない。射精したくて堪らない。

「出させて下さい、お願いします！」

涙すら浮かべて懇願する。手足をばたつかせるが、頑として拘束が揺るがない。

「まだまだ。早まらないの。時間はたっぷりあるんだから。楽しみましょう」

陰嚢の全体にテカリを擦り付けると、今度は太腿だった。オイルが揮発せず、ぬめりを失っていない掌が、砂浜で日焼け止めオイルを塗る手つきで往復する。内側が終われば外側に、外側が終われば内側に。

そうして勃起のビクつきが収まった頃に、再び手淫が始まった。幾分鎮まったものの、依然として熱を帯びる亀頭が、上からたらーっとオイルを浴びせられる。

ひんやりしたオイルが亀頭に接地し、重力に引かれて、血管浮き出る陰茎をゆっくり伝って根元まで垂れていく。

その光景を眺めた後、菫は掌に潤滑油を追加した。ぬちゃねちゃと手の平の全体に塗す。熟女の手がみるみる鈍い光沢を放ち始める。

「さぁ、待望のオイル手淫タイムよ～。どう？　嬉しい？」

若い学生はコクコク頷いた。飼い主に尾を振る飼い犬の様に淀みなく。

菫はニッコリ微笑んだ。淫らな手つきで、再度、若い男根を擦り始める。そのやり方は最初の時と大差のない内容だったのだが、射精欲求の虜となっていた青年をたちまち昂ぶらせた。

手の中の勃起が、激しくしゃくり上げている。青年の腰が、ビクンビクンと競りあがる。その中には随意的なものもありそうだった。ちょっとでも、余計に刺激を受けて、射精を果たしたいと言う感情が滲み出た腰振りもあったからだ。

「あらら、もう限界らしいわねぇ。いいわ、出させてあ・げ・る」

菫は熱く滾る男性自身を跨ぎ、クロッチをずらす。先端を入り口にあてがう。

「さぁて。オイルたっぷりのビキビキ若勃起のお味はどうかしら」

ぎゅちゅ……。

「んっ……ぬるって……あぁ……やっぱり、手で握っていた時とはまた違う熱さと硬さね。アタシの女がこじ開けられてく……んんっ」

片目を瞑り、ゆっくりと腰を沈ませる。射精を熱望する若い雄を、歳を重ねた雌が本格的に捕食し始める。

「うぁあっ、絡み付いて……出るぅ……うぅっ」

「あちゃ～、読み違えたかぁ。もう、本当に駄目みたいねぇ。もう少しゆっくり楽しみたかったんだけど仕方ないかぁ」

一番奥まで受け入れると、青年の背中に手を回し拘束を解いた。自由になった両手と自分のそれを組ませて支えにする。

「ほら、学生クンも頑張って♪」

腰を使い、上下左右、円の軌跡を描いていく。ぬめる雌肉に包まれた青年も、ずっと年上の女社長にすがりつき、息を合わせて腰を振る。

「そう、いいわ、上手よ、その調子」

褒め言葉が心地良い。青年は射精を目指し、ぬるぬるの膣内で分身を擦り続ける。

目の前で、服の圧迫をものともせずにブルンブルン巨乳が揺れる。視覚的な官能が勃起の充血度合いを増大させる。

しがない学生の自分が、優秀な年上女性と交わっていると思うと、より興奮する。隔たりある者との一体感が、性的な喜びへと転化していく。

「社長さん、社長さん！」
「ふふ、先っぽがもうすっかり膨らんで、出るのね、いいわよ、このまま中で射精して。閉経しちゃってるから、妊娠の心配は無いわ。オンナの、ぬるっぬるの柔かいお肉の中でどびゅっどびゅっ、て何も考えないで射精したいでしょ？　ね、学生クン」
「はい、射精したいです、女の人の、社長さんの中で思い切り！」
嘘偽りの無い欲望を吐露した瞬間。
ビュゥーッ！　ドビュッ、ドビュビュッ！　ビュルッ！
一番奥に、猛烈な勢いで、熱くて白い迸りが殺到する。
「くぅっ～！　若い子の二番搾り……あぁ、いいっ……奥にビュビュッて……二回目は一番勢い良く飛ぶらしいけど、やっぱりこの感触はイイものだわ～」
片目を閉じて、自身の最奥が粘っこい液で叩かれている感触や、閉ざされていた膣内に若い雄汁が染みこんでいく様子を感じ取る。その光景を想像もする。
「うぅっ、膣が蠢いて……搾り取られる……っ！」
ビュルッ、ビュッ！
終わりかけた射精が、強制的に再開させられた。
「あはぁ、若い子の、学生クンの精……美味しい……」

熟女社長は天井を向いて、喜色満面で呟いた。
「はぁ、はぁ、凄い……」
脱力した青年が漏らし、と。
「さぁ、もう一回戦といきましょうね♪」
若い学生にシャツを着せてやる。彼の日常の象徴であるそれを身に着けさせたまま膣内に射精させてやる事で、年増女との記憶を深く刻みつけてやろうと思って。このシャツを見る度に、今日の情事を思い出させたくて。
（学生クン、アタシを刻み付けてあげるわ）
そして、肩に手を掛け、服をずらす。たわわな豊胸がプルンと露になる。肌の衰えを見つけられない。絹の不連続性、滑らかさ、光沢を誇る美しくてふくよかな胸だ。
「さぁ見て。おばさんのおっぱい、どうかしら……素直な返事をありがとう」
膣の中で萎えかけていた男根が、勃起へと変貌し、ビクンと膣内を揺らしたのだ。
菫は続けて両肩にかかった部位を外した。衣服が腰までずり落ちた。
「さぁ、頑張って。若いんだから♪」
ずちゅっ、にゅちゅっ、じゅんっ、じゅずっんっ、ぎゅちゅっ！
「あぁ、若い子のお○んちん、硬くて逞しい若い子のお○んちん♪」

心底嬉しそうに、歳を重ねた女社長が腰を振る。先ほど急いで行った腰振りを、今度はゆっくりじっくり行う。

若雄の精でぬめりを増した膣内のそこかしこを、逞しい勃起で擦らせる。主導権は菫にあるのだ。どこを擦らせるのかは思いのまま。

（久しぶりのナマ擦り！　若いお○んちんでのナマ擦り！）

青年も快感を感じていた。同じ所を何度も何度も突かされるのも、膣を窄められてずんずん往復させられても、背筋にゾクゾクと痺れが走る。抜かずの連戦、回復時間をろくに与えられていないと言うのに、性感があまり鈍らない。

「見て、アタシのおっぱい。えっちな雑誌やＤＶＤの中の若い子と比べても負けてないでしょ？　このおっぱい、今は学生クンのものなのよ、触っても揉んでもいいわ」

言葉に甘え、鷲掴みにする青年。

「あんっ、最初から大胆ねぇ。そのままぎゅって揉んで揉んで」

痛苦を与えまいと気を使っているのか、いきなりでなく少しづつ少しづつ力を加えていく。若雄に、磨き上げてきた自慢の胸を弄られ、菫は甘い息の詰まりを感じた。

「そう、これ、これもいいの」

柔かい球体に、青年の指が食い込んでいる。めり込んだ周囲に影ができている。そ

第二章　肉食系女社長

の濃度が濃く薄く変化する度に、ずっと主導権を握っていた女社長の吐息が弾んだ。
「んんっ、いいっ、上手いわぁ、そう、いいっ」
バランサーと化している手の位置をずらし、胸の前にある空間を空け渡す。
「社長さんの胸、柔かくて、あぁ興奮するっ」
肉棒に血が集う。その反面、頭がぼうっとする。だが気持ち良い。青年が思う。
「んふぅ、もう出そうね。学生クンも、おっぱい揉みながらするの好きなのね」
胸を揉まれながら腰をふりつつ続ける。
「良かったわよ、久しぶりにオンナにさせてくれて有難う。さぁ、思い切り出して」
「はぁっ、こんな学生が、社長さんの様に綺麗で気立てが良くて、優秀な人とセックスできて、こっちの方こそ嬉しいです、あぁ、出します、また、社長さんの中に！」
ビュッ……ピュッ……。
腰を目一杯浮かせ、ブリッジで熟女社長を持ち上げつつ、若雄は残滓を放った。歯を食いしばり、有能な熟女へありったけを注ぎ込むつもりで。
「んっ……素敵よ、学生クン……」
菫は若者の精を全て受け止める。
ドサリ。

第二章　肉食系女社長

硬直が解けて二人が折り重なった。上に被さる熟女社長の背中に、青年の手が回された。恋人を抱き締める按配で、母親程も歳の離れた彼女を引き寄せる。

「ふふ……ごちそうさまでした♪」

セックスの疲労で寝息を立て始めた青年の頬に、菫はそっと唇をつけた。

「と言う訳なのよ～。あーもう、お腹一杯、ごっそさんって感じよねぇ～」

夕食の肴にと、卓を囲む桜と小百合に、菫は情事の様子を話して聞かせた。

「ねぇねぇ、お肌ツルツルでしょ？　そりゃぁ、お手入れは欠かしてないけれど、もっと違う、ヤりまくりの新婦さん、いえ毎晩お盛んな奥さん特有の肌ツヤ？」

「……そんなの見た事も聞いた事も無いんだけど」

「そう？　さっちゃんなら分かるでしょ？」